

Title	研究員紹介
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.6, (2009. 1) ,p.7- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000006-0007

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

における教育実践(感性)のバランスを念頭において構成された。

シンポジウムでの議論により、トップダウンに、しかも、数値で学校教育各段階での英語教育の目標を設定することの問題点が明らかにされ、同時に、外国語教育としての英語教育における母語の重要性の認識が強く打ち出された。

シンポジウムの最後に、今回の登壇者を中心に作成した、教育再生懇談会に対する要望書の概要を紹介した。この要望書は10月20日に懇談会の安西祐一郎座長に対して直接提出した。

このシンポジウムに関連する資料は天津由紀雄研究室のウェブサイト <http://www.otsu.icl.keio.ac.jp/> からダウンロードできる。また、このシンポジウムをもとにした書籍を、シンポジウムを後援した慶應義塾大学出版会から2009年春に刊行する予定である。

12月21日には、日吉キャンパスJ14教室において、佐藤学さんの講演「言語リテラシー教育のポリティクス」と題された講演と佐藤さんと天津由紀雄の対談が開催された。(天津由紀雄)

GCOE ワークショップ “Patterns in Language and Thought” (9月8日開催)

“Patterns in Language and Thought”は9月8日(月) 午後1時30分～5時に、慶應義塾大学三田キャンパス東館4階セミナー室で行われた。ワークショップではNick Enfield, Asifa Majid、今井むつみの3名が発表した。Dr. EnfieldとDr. Majidはオランダのマックスプランク心理言語研究所のシニアリサーチャーで、Majidさんの私との共同研究打ち合わせのための来日と、Enfieldさんが認知言語学会の招待講演のための来日の日程がちょうど重なったので、3人で言語と思考の関係について、異なるアプローチにより多面的に考える機会を持ちたいということで企画した。

Enfieldは言語使用の社会的側面から、話者の語や文構造の選択は談話の文脈によって大きく決まると主張し、ラオ語をはじめとした様々な言語での例を用いて主張を裏付けるデータを提示した。Majidは“break-cut”という、対象を破壊、変形させる動詞の意味領域で、英語、オランダ語、中国語、日本語をはじめとした多くの言語で領域がどのように言語化されているかを調べた実験をケーススタディと

して、世界の言語で、動作イベントを言語化する際の、普遍的な知覚的、言語的制約についての理論を提示した。今井は助数詞、性文法などの文法カテゴリが対象の認識にどのような影響を及ぼすかという言語相対性の問題に関して、ドイツ語話者、中国語話者、日本語話者を比較した一連の実験研究を報告し、言語相対説に対する証拠を示すとともに、言語普遍的な概念的、知覚的制約の重要性を指摘し、言語相対説に関する新たな考え方を提示した。

このワークショップは日本認知言語学会の協賛もあり、学外から非常に多くの聴衆が集まって、セミナー室の椅子が足りないほどであった。時間も3時間半とたっぷりとしたつもりだったが、それぞれの発表が一時間に及ぶものになり、フロアからの活発な質問、コメントもあって、予定時間を超えてしまい、ディスカッションを時間の都合で途中で打ち切らなければならなかったのが残念であった。

(今井むつみ)

研究員紹介



皆川泰代

2年前までJST研究員として21cCOEの施設で乳幼児発達研究を行っていましたが、10月より今度は特別研究教員としてグローバルCOEのプロジェクトに参加することになりました。赤ちゃんの音声言語の獲得、社会行動の発達とその脳内基盤について研究を行っていますが、本プロジェクトではこれらを「論理と感性の発達」という切り口で明らかにしたいと思っています。本COEが提携するフランスENSそして理化学研究所との共同研究によってまだまだ謎の多い赤ちゃんの脳の仕組み、働きにせまっていくつもりです。

日根恭子

10月より、非常勤研究員としてお世話になっている日根恭子です。

顔の認知についての研究を行っています。特に、顔の部分に注目した部分的処理と、顔を部分に分けずに一つとして捉えたときになされる全体的処理が、顔の認知においてどのような役割を果たしているかを解明することに興味があります。グローバルCOEでは、引き続き顔の認知についての研究に携わり、「論理」と「感性」という対立する処理様式において、同様に対立する処理様式である「部分的処理」と「全体的処理」がどのように関わっているのかを実験的に検討していきたいと思っています。

今後とも、よろしくお願いいたします。



丹野貴行

ヒトは2つの事象の間に因果関係があるかどうかを、どのように判断するか。原因事象の有無をCとC、結果事象の有無をEとEとそれぞれ書くことにしよう。これまでは、 $P(E|C) - P(E|\bar{C})$ で計算される ΔP に従うという、確率的な論理のみが注目されてきた。これに対し本研究では、両者の

時間的関係におけるヒトの論理を検討する。強化スケジュール研究からの知見(e.g., Reed, 2001)に従えば、たとえ ΔP は同じであろうとも、結果事象の直前に原因事象が多く存在した場合ほど、ヒトはそこにより高い因果関係を見出すことが予測される。本研究ではまた、予測されるこの結果を原因—結果事象の時間的距離の増加に伴う両者の連合の減少であると解釈し、これを行動的セルフコントロール研究と同様の割引関数によって数値モデル化することを試みる。



篠塚一貴

カワスズメ科の魚であるコンビクトシクリッドを対象に研究をしている。コンビクトシクリッドは一夫一妻で繁殖し、両親とも稚魚の世話をする。たとえば体を使って底砂とともに堆積物を巻き上げて餌の供給をしたり、はぐれた稚魚を口に入れて集団に戻したりする。これはどのようなメカニズムによるのだろうか？

哺乳類では、バソプレッシンやオキシトシンというペプチドホルモンが中枢性に作用して親行動を調節することが知られている。魚類における稚魚の養育や回収は、哺乳類が示す同様の行動とは独立に進化したものと考えられるが、その調節にはバソプレッシンの相同物質であるバソトシンが関わっていることを示唆する結果を得、現在はイソトシンについて実験を進めている。また彼らは、状況に応じて養育行動と回収行動の配分をすばやく切り替えていることから、そのような切り替えがどのように生じるのかについても興味を持っている。